

当事者としてライフストーリーを聴き話すことの力

—いかに性感染 HIV 陽性者の声を紡ぐことができるか—

一橋大学大学院社会学研究科 博士後期課程

日本学術振興会特別研究員

大島 岳

1 目的・方法

HIV/エイズの登場から三十年以上の歳月が経った。1980年代後半から90年代のエイズパニックの時代を経て、日本では1997年にART(多剤併用)療法の登場によって、エイズは「死ぬ病気」から「慢性疾患」へと急激な疾患像の変化を迎えた。だが、服薬を中断すればウィルスは再び増殖し免疫機能を破壊し死に至らしむ。現時点では依然として致死的疾患であり、治癒はせず半永久的に治療を受ける必要がある。さらに、死ぬ病気から慢性疾患への急激な疾患像の変化とは対照的に、HIVに対するスティグマは依然として強いことは放置されている。歯科や透析など診療拒否、雇用の差別(医療機関を含む)、とりわけゲイ・コミュニティや電子掲示板では、個人を特定した差別的・排他的な書き込みなどが現在でも散見される。

井上洋士らが2013年から2014年に行った当事者参加型調査によれば、全国の回答者913名のうち「HIV陽性であることを誰かに打ち明けることは危険なことである」(81.4%)、「私がHIV陽性と知ったとたんに、物理的に距離を置かれたことがあった」(43.2%)、「HIV陽性であることで、他の人とセックスしたり恋愛関係になったりすることを避けている」(53.3%)と、陽性者にとって自分自身のことを話すことは非常に危険で、安心して話せる場がないことが示唆された。この裏で、苦しみの持ち主としての当事者性を重視するピア・サポート(伊藤編2013)に関心が向くよりも、むしろ心理カウンセリングの医療化(横田・大北2016)が進行している。A. Frank(1995=2002)の言葉を借りれば、医学・心理学雑誌の支配的テキストは、HIV/エイズで苦しんでいる人を必要としたと見ることさえできる。

本報告は、語れないことであたかもないものとされてしまう「隠された経験の領域を記述」(Slim and Thompson 1994)し、そのことで従来の歴史から見落とされた諸相を発見することを目的とする。当事者の立場からNPOのニューズレターで調査協力を募り、20名の協力者を得た。そして調査者でもあり当事者でもある報告者とのライフストーリーを聴き語り合う「対話」(石田1973, Holstein&Gubrium1995=2004, 桜井・小林2005)を一次データとし、Frank(2012)のDNA(Dialogical Narrative Analysis)を参考に分析した。

2 結果・考察

カウンセリングを含むチーム医療は、HIV陽性者なかでも薬物や性依存など重層的な生きづらさを抱える者が回復するために重要な役割が期待されている。臨床では複雑な苦悩経験は、病の深さを示すエビデンスとして理解されやすいが、実際には反対である。つまり、生きづらさや苦悩に対応する楽しさや危機に直面する技術を実際に見いだすことができる。しかし、この楽しさが医療モデルでは非健康的とされる場合(e.g. ナマのセックス, 薬物使用 etc.)、多様な意味合いを含む経験(e.g. 人とのつながりや親密性の希求)は病という文脈に回収されてしまう。その結果、スティグマは強化され、社会に向けてオープンには語れないことで生きづらさはより牢固なものとなり得る。つまり、医療そのものがスティグマ化に加担し当事者の生きる力を削ぐ構造的な限界を内包している。しかし、一見すると健康的でない不合理な生き方は、人生の軌跡に着目すると既存の支配文化の論理とは全く逆に、実際には当事者間では合理的であり得ることが多い。こうしたさまざまな苦悩とともに生きることを、HIV陽性陰性の別に関わらず語り聴き合うことのできる場を増やしていくことで、他の人がどのように実際にさまざまな社会的な力や不確実性と向き合ってきたかを学び、それぞれの仕方でも活かしていくことができる。従来、質的研究は、研究者のポジショナリティ、すなわち客観化をおこなう主体を客観化するという意味で反省・省察(reflectivity)の観点を重視していたが、むしろ主体化を保障する客観的な条件を実践知の基礎(Flyvbjerg 2001)を用いてその都度探る知や戦術をさぐる実践的理論を志向することができる地点に在ると言える。質的研究は、研究者と当事者が社会を学び合うという意味で、「社会(学)の民主化」に寄与することができるだろうか。

参考文献

A. Frank, 2012, "Practicing Dialogical Narrative Analysis," J. Holstein and J. Gubrium eds. *Varieties of Narrative Analysis*, Thousand Oaks, CA: SAGE, 33-52.